

キャンパスで
楽しさあふれる
美術作品たちとの出会い





■関西学院会館エントランスに掲げられた東山魁夷(1908-99)のリトグラフ《山嶺湧雲》。関西学院会館の完成を記念して夫人の東山すみさんより寄贈されたもの。東山作品は初等部校舎にも《緑の詩》など数点が飾られている。

■中矢代恵子(1970年商学部卒)の《翔》。関西学院会館の完成を記念して、校歌「空の翼」の歌詞にある「力」を6羽の鳥が力強く羽ばたく様子で表現されている。



■ロビー正面の大作2点は、片岡真太郎(1952年経済学部卒)の《それは風のなかに》(左)と《光は招く》。空の翼、若き力、風、光をモチーフとした2部作。原田の森、上ヶ原、神戸三田の3キャンパスそして神戸三田キャンパス会議室には青年群像の一つのイメージとして描かれた作品《翼よ》が飾られている。

関西学院には美術専門の学部・学科が存在しないにも関わらず、数多くの美術家を輩出しています。また、キャンパス内では学院が所蔵する多彩な作品を見ることが出来ます。これらは驚くべき事実であるとともに、私たち同窓の誇りでもあります。今回は美術に造詣の深い方々に、関西学院ゆかりの美術家とその作品について語っていただきました。

―はじめに美術との関わりについて簡単に自己紹介をお願いいたします。

東浦 中学、高校と関西学院にお世話になりました。大学は武蔵野美術大学に進みました。大学院を卒業する時に、高等部の恩師の中川久一先生に「自分の代わりに母校に戻ってこないか」とお声掛けいただき、美術科の教師として帰ってきました。着任して32年になります。

佐々 私は高校までは公立の学校に通

いサッカーに明け暮れていましたが、大学では何か文化的なことをしたいと思っていました。「絵画部弦月会」に入部していた高校時代の同級生にアトリエに連れて行ってもらい、そこで出会ったクセの強いメンバーと過ごす時間が楽しくなって美術活動にのめり込み、現在は会社で美術デザインの仕事に携わっています。

白井 私は中学部から関西学院で育ち、1981年に社会学部を卒業しました。大学時代は美術とは縁のない生活でした。就職先が今はなくなったナビオ阪急で、たまたま美術館を所管する部署に配属され、展覧会の原稿の下書きをしていました。これが美術との関わりの始まりです。その後、ナビオ阪急を退社して、画廊や画材販売を手掛けるようになりました。

若い感性が本物に触れることが大事

―高等部では多くの美術作品を所蔵していると聞きました。

東浦 関西学院に戻ってきて、中川先生から「この作品だけは大事に保管するように」と託されたのが、同窓で、学院初期の美術教育や絵画部弦月会を支えられた神原浩先生の《曇天の安乗岬》でした。神原先生は「若い感性が本物に触れることが大事なのだ」といつもおっしゃっていたそうです。絵画部のメンバーにも「とにかく本物に触れなければ駄目だ。それが一番だよ」と声を掛けておられました。「若い感性が本物に触れることが大事」。この言葉がずっと私の頭の中に残っており、母校に美術教師として戻ってきた時、「本物の美術作品を関西学院に集めよう」と考えたのです。

最初に手に入れたのは同窓の吉原治良さんの作品です。ちょうどそのころ、お孫さんが関西学院に通っていたこと

もあり、ご子息の吉原雄雄さんにお願いに上がりました。「そういうことでしたら」と快諾いただき、関西学院にやってきました。《作品1961-62》。日本の前衛美術の第一人者として活躍された吉原治良さんは、最初は具象絵画からスタートして、その後に悩みを悩み抜いて、抽象を経て最後に「円」の表現に辿り着きました。その葛藤が見え隠れする過渡期の作品です。

同窓を代表する美術家 吉原治良

白井 吉原治良さんは絵画部弦月会に所属していましたが、歴代の絵画部出身者の中でもずば抜けた存在だと思います。

東浦 中学・高校の美術の教科書にも登場しますからね。

佐々 67才で急逝されてから50年近くが経ちますが、我々絵画部の後輩のみならず世の中の多くの美術関係者の中でその精神が今も生き続けていると思います。

白井 ビジュアルもいいですよ。格好の良い男性です。

佐々 関学生ならではのバランス感覚でしょうか、仕事(家業の吉原製油の経営者)と美術活動を両立され、センス・時代感覚・行動力・リーダーシップを兼ね備えておられました。

東浦 最後の弟子に当たる松谷武判さんや堀尾貞治さんにお話を伺ったことがありますが、「吉原さんの家に行



東浦哲也氏
関西学院高等部美術科教諭、S54年高等部卒



白井良司氏
小大丸画廊主宰、S56年社会学部卒



佐々文章氏
朝日放送テレビ(株)総編成局美術部、H元年経済学部卒

くといつも美味しいものを食べさせてくれる」とおっしゃっていました。また、普段は目にすることができない珍しい外国の面集を見せてくれたそうで、そのように吉原治良さんを慕って集まってくる若い芸術家たちをすべて受け入れていました。

白井 1920年代の《魚のある風景》シリーズの背景に英字新聞が描かれていますよね。

東浦 海外にアンテナを張っていらっしやったのでしょうか。常に自分が見たことのないものを取り入れようとしていました。

白井 この時代の画家には珍しく、ヨーロッパへの留学を経験されています。海外に行かずとも自宅で外国の文化を手に入れることができたからかもしれませんね。

良家の子息が集まっていた 関西学院

—吉原治良さん以外にも関西学院は多くの美術家を輩出しています。

白井 1920年代には、大森啓助さん、野口彌太郎さん、北村今三さんなど、そうそうたるメンバーが卒業しています。吉原治良さんもこの時期ですね。その後、30年代には堀口泰彦さん、児玉幸雄さん。40年代は杉本亀久雄さんや川西祐三郎さん、吉原治良さんの弟子だった村上三郎さんや嶋本昭三さんが卒業しています。また嶋居玲さんも中学部に1年半ぐらい在籍していたようですね。

—なぜ、こんなに多くの美術家が生まれたのでしょうか。

白井 関西学院には良家の子息が集まっていたからでしょうか。

佐々 戦前までの時代は「絵を描く」ということのハードルが現在よりはるかに高く、油絵の具やキャンバスなどの画材も世間一般にはあまり売られておらず非常に高価なものでした。そのような時代に自由に絵を描けるのは、相当裕福な家庭に限られていたと思います。

東浦 今の時代でも絵を描いていたら「将来はどうするの?」と言われることが多いのではないのでしょうか。やはり「美術は特別な人が進む道」のようなイメージがあります。

白井 関西学院は、いろいろな経験をすることを認めて、見守ってくれる学校だったのでしょうか。絵に没頭している、皆さん、勉強にもきちんと取り組んでいたと思います。

美術家を育てた 「絵画部弦月会」

—ほとんどの方が絵画部弦月会に所属していたのですか。

佐々 1913年頃に神原浩さんから絵の好きな数名の学生たちが学内で集まって過ごすようになったのが絵画部弦月会の始まりで、その2年後の1915年4月に正式発足しました。東浦 神原先生は1913年に高等

関西学院所蔵の作品を紹介します。ここに掲載したものがすべてではありません。ほんの一部です。母校のコレクションを通して、美術の世界を楽しんでみませんか。(一)内は保管場所、公開展示されていない場合もあります。



黒田保《モンマルトル》(関西学院会館)
1952年文学部卒。1966年に渡欧留学し、パリ・アカデミー・ジュリアンおよびグランシュミエールで学んだ。心斎橋絵画研究所、東京デザイン研究所、心斎橋小大丸絵画教室などの講師を務める。



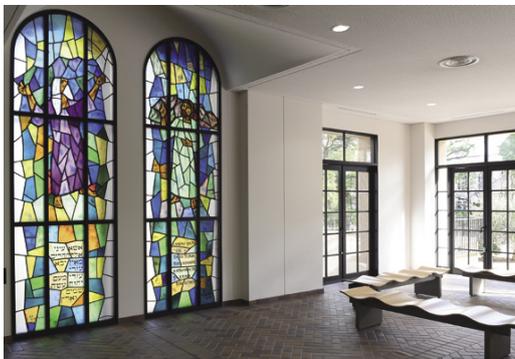
石阪春生《女のいる風景》(関西学院会館)
1951年経済学部卒。小磯良平に師事。織細で幻想的な筆致で描く女性像は、関西を中心に幅広い層に愛されている。新制作協会会員。神戸市在住。



村上三郎《作品》(関西学院会館)
1948年文学部哲学科卒。具体美術協会のメンバー。パフォーマンスを含む美術活動は国際的評価も高い。



■上ヶ原移転時に図書館として建てられた時計台。現在、その2階は大学博物館として“活躍”している。踊り場に飾られている《学院風景—上ヶ原移転当時》は堀口泰彦（1937年文学部卒、40年商経学部卒）の作品。1939年頃の制作と推測されている。



■2014年、創立125周年を記念して中央講堂はかつての正面のイメージを残しながら大きくリニューアルされた。エントランスホールのステンドグラス《聖書と自然》は田中忠雄の作品で、取り壊された千刈セミナーハウスのチャペルから移設されたものなので、懐かしさを覚える同窓も多いかもしれない。

学部商科を退学し、メキシコに行かれています。10年近く外国で過ごした後、母校に旧制中学部の教師として戻ってこられてからは、絵画部のメンバーを阪神間の作家のアトリエに通わせていたそうです。当時の絵画部は中学生から大学生までが一緒になって絵を描いていたようで、きっと神原先生がコーディネートをされていたのでしょうか。

た貯水池のほとりにあり、児玉幸雄さんの《学院風景》という作品にはアトリエ前から眺めた時計台の背面が描かれています。大学図書館が建った現在では見ることができない光景です。

面倒見が良く 人のために動ける関学出身者

佐々 神原先生は本当に周囲の面倒見が良かったと聞いています。神戸の広い自宅に学生たちを呼んで卓球大会をしたり、クリスマスパーティーを開いたりしていましたが、当然学生たちは喜んで遊びに行きますよね。吉原治良さんもそうですが、周りの人のために自らすすんで動く奉仕の精神を持つ

東浦 私が勤め始めたころ、経済学部の事務室に画家の田村孝之介さんの絵が飾られており、どうして田村さんの絵がここにあるのか不思議に思いました。後で聞くと、絵画部弦月会のメンバーが神原先生の紹介で田村さんに絵を教わっていたとのことでした。

白井 一流の美術大学で学んでも、それだけの有名画家に師事することはできないでしょうね。当時の阪神間の文化度は非常に高かったですから。

—小磯良平さんも関西学院の方と関係が深いんですね。

佐々 在学中に絵画部の部長を務めた竹中郁さんと小磯良平さんは神戸二中（現・兵庫高校）時代の同級生で生涯にわたる親交があり、その関係で小磯さんのアトリエにも部員が入り浸っていました。小磯さんと田村孝之介さんが絵画部のアトリエ前で部員たちと並ぶ写真も残っています。竹中さんは在学中から詩のグループで活躍されましたが、やはり何かと周囲を引き寄せる人でした。その頃六甲登山口界隈に古い洋館があり、そこに住み着いていた若い前衛芸術家たちと交流されていました。その中から関西や日本の文化を築いた人物が何人も誕生しました。そういつた人と人との雑多な出会いから文化が作られますが、その中心に関西学院出身者がいるというケースは世の中に多いのではないのでしょうか。



吉原治良《作品1961-62》（高等部）
1928年高等商業学部卒。54年に具体美術協会を結成。実験的表現を試み、国際的にも高い評価を得ている。



小磯良平《聖書より》（学院本部）
1903年神戸生まれ。卓抜したテクニックを根底に油絵技術の伝統を追究し日本人の油絵を確立。昭和の代表的洋画家の一人に数えられる。1983年文化勲章受章。



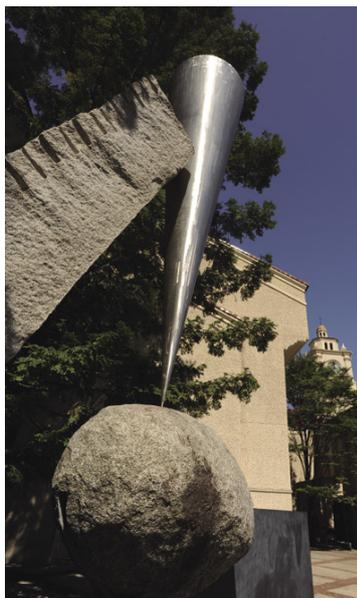
川西祐三郎《正門前》（学院本部）
1944年専門部英文科卒。47年商経学部卒。42年に日本版画協会展初入選。卒業後阪神電気鉄道に入社し、会社員と版画家を両立。定年退職後は30年以上画作に専念し、膨大な数の作品を発表した。



吉原通雄《無題》（関西学院会館）
吉原治良の次男。1955年経済学部卒業後、家業の吉原製油に勤務のかたわら制作を継続。54年の具体美術協会の結成に参加。同窓の村上三郎、嶋本昭三らとともに、海外を含めた多彩な美術活動を展開した。



■1997年に竣工した新大学図書館。同時に数々の美術作品が設置された。屋外には新宮晋の《光の海》(写真上)、植松奎二《浮くかたち一垂》(写真下)がキャンパスに溶け込んでいる。



■大学図書館エントランスでは、立ち止まって少し見上げてください。小さなステンドグラスの窓は、森場さとし《光あれ》が迎えています。



■新学生会館が竣工したのは1984年。吉原治良が1951年に大阪・朝日会館のホール絨帳のために描いた原画を復元したモザイク・タイル壁画が2階学生ラウンジの壁面に配置されている。



白井 まさにマスターリー・フォー・サービスです。

東浦 そういいう関西学院の同窓生の姿を同窓でない人がちゃんと見ておられて認めてくださっています。時計台の2階に大学博物館がオープンする時にキリスト教関係の美術展を開催することになり、キリスト教絵画の第一人者で安井賞作家でもある堀江優さんの作品を並べたいと考えました。堀江さんに連絡をとり、こちらの思いをお伝えしましたら、ものすごく関西学院のことを好いてくださっており、「関学さんからそんな話をいただけるのは光栄なこと、ぜひ寄贈させていただきます。関学に置いていただけるならうれ

しいです」とおっしゃっていました。白井 うれしいことですし、ありがたいことですね。

作品収集における基本の四つの考え方

— 高等部では今も作品の収集を続けておられますね。

東浦 収集については基本の考え方が四つあります。一つ目はキリスト教美術。二つ目は阪神間モダニズム。三つ目は同窓。四つ目は具体美術協会。この四つの系列に当たるいい作品があれば何とか手に入れたいですね。やはり、普段から「こういう作品がほしい」と熱くアピールをしていないと作品はやつ

て来ません。鴨居玲さんの《切り裂かれた教会》は、私が鴨居さんが旧制

中学部に在籍していたことを知り「鴨居玲を手に入れたい」と言っていた時に、たまたまある方がキャッチしてくださって、「こんな作品があるよ」とご紹介いただいたのが始まりです。

《切り裂かれた教会》は鴨居さんの有名な教会シリーズの一つです。宙に浮いた教会など特異な作品が多く、ヨーロッパで生活する中で直面した宗教という壁に対して自分の存在を問いつけています。この作品は1970年に描きかけの絵を作者自らナイフで切り裂いたものですが、鴨居さんが弟のようにかわいがっていた現代美術家の榎



神原浩《曇天の安乗岬》(高等部)
1912年普通学部卒。大正期にメキシコへ渡り、キューバの美術学校で勉強後、スペイン、フランスで学んだ。帰国後、神戸女学院と関西学院で教鞭をとる。銅版画と油彩画を手がけ、洋風建築や海、灯台を題材に好んだ。



野口彌太郎《ニースのカーニバル》(高等部)
1920年中学部卒。30歳で渡欧しパリを拠点に活躍した。海辺や港の風物に惹かれ、好んで長崎を描き、93年には同市にその作品300点を集めた「長崎市野口彌太郎記念美術館」が開館し、画業に触れることができる。



田中忠雄《弟子の足を洗う》(高等部)
1903年札幌生まれ。神の言葉を表現した作品に慈しみと愛が描かれている。学内に数点の作品がある。



渡辺禎雄《最後の晩餐》(高等部)
1913年東京生まれ。敬虔なクリスチャンの版画家。染織工芸の「型染」を和紙に応用した染色版画の技法で聖書物語の世界を描いた。大学図書館はじめ学内に多くの作品が所蔵されている。

忠さんと話し込んでいた時に、妥協を許さない作家の姿勢をキャンバスを切り裂くという行為で示したのです。榎さんに渡された作品はやがてあるギャラリーに託され、縁あって関学に寄贈されました。

白井 絵は自分が行きたい所に行くものです。絵を扱う仕事をしていると、しばしばそういう場面に出合います。鴨居さんの作品も関西学院だから、母校だから戻ってきたのでしょ

う。落ち着くべき所に落ち着くのです。絵には作家の魂が込められていますからね。

東浦 感性が鋭い人であればあるほど、この作品はここに

キャンパスで出会える数々の名作

— 一番好きな作品を教えてください。

佐々 時計台の踊り場に飾られている堀口泰彦さんの《学院風景—上ヶ原移転当時》です。移転間もない頃のキャンパスを俯瞰で描いた大作ですが、当時の学院周辺に高層の建築物はありませんので実際にあの角度から眺めることは不可能です。芸術にはその作者の生きる「時代の空気」が表現されていることが大事ですが、牧歌的風景というか、当時の学院の雰囲気がよく感じられる作品で私は



好きですね。

東浦 私は野口彌太郎さんの《二ノスのカーニバル》です。野口さんの作品は東京国立近代美術館や長崎市野口彌太郎記念美術館に展示されていますが、この作品がおそらく一番良いと思います。先日も東京国立近代美術館で野口作品を見る機会がありました。この《二ノスのカーニバル》の方がはるかに良いですね。色彩の美しさとい

い、躍動感といい、これだけの絵が1920年代に描かれたのはすごいことです。東京国立近代美術館の第1室に展示されるのにもふさわしい作品だと思います。

佐々 野口さんのこの作品はどのような経緯で関西学院にやつて来たのですか。

東浦 ご本人が手元に大事に残していた作品らしく、奥様が「母校に置いてほしい」と寄贈してくださったのです。ありがたいことです。高等部の会議室に飾られていますので、すぐに見ることはできませんが、ご要望があれば部屋の鍵を開けてご覧いただけます。

白井 私は関西学院会館に飾られている黒田保さんがパリを描いた絵《モンマルトル》が好きです。あとは同じく関西学院会館にある村上三郎さんの《作品》ですね。

東浦 村上三郎さんは具体美術協会

で活躍した人で、ハトロン紙を張った大きな木枠を何枚も並べ、それを体当たりで突き破って駆け抜ける《通過》というパフォーミングで世界的に有名です。関西学院会館の《作品》は紙を突き破る時の衝撃をイメージしたものでしょう。

— 本日は興味深い楽しいお話があり、ありがとうございました。

学院にはまだまだ多くの美術作品が点在しています。会議室に掲げられていたり、倉庫に収蔵されていたりして、残念ながらすべてを鑑賞できるとは限りませんが、上ヶ原だけでなく、西宮聖和、神戸三田、大阪梅田、東京丸の内、宝塚、千里国際、どのキャンパスでも有数の作品に出会えます。思わぬところで遭遇することもあるかもしれません。キャンパスにさりげなく置かれているなんて、素敵なキャンパスではありませんか。



鴨居玲《切り裂かれた教会》(高等部) 1928年金沢生まれ。一時期旧制中学部に学んだ。金沢市立金沢美術工芸専門学校卒。69年に「画壇の芥川賞」と称される安井賞を受賞して脚光を浴びた。

座談会を終えて

編集委員長・塚本恵美子

関学には、同窓生として誇るべきものが沢山あります。近頃何かと話題に上っていたアメリカンフットボール!陸上の多田君の活躍、グリークラブの美しい歌声等々、枚挙に暇がないくらい。

その中であって、宝の様な作品が関学には沢山あるのに、意外と同窓生に知られていないものに、絵画の作品があります。同窓会館、博物館等色々な所に飾られているのですが、何気なく通り過ぎてしまっていないでしょうか?

これらは殆どが関学の卒業生の作品たちです。特別な美術制作の専門機関を持たない関学にあって、どうしてこんなにも後世にも名を遺す画家や作家が生まれてきたのでしょうか。昨年末に関学博物館において『美術と文芸—関西学院が生んだ作家たち』と名付けた展覧会が開催されました。この展覧会に触発されて、《関学にある美術作品たちを、同窓の皆様にもっと関心と知識を持って鑑賞して頂きたい!》との我々の願いからこの企画は生まれました。もちろん、私たちも「そんなんしらなかった」事がいっぱいでしたので、「分からない事は専門家に聴け!」と、関学ゆかりの美術関係の方に集まって頂き、座談会をお願いしました。その時の一番の願いは、「素人にも分かる楽しいお話を」でした。それを受けて、其々の方が画家や作品の楽しいエピソードやお話を沢山して下さいました。これを読まれた後に、たとえお一人でも足を止め「そうか、これが?」と作品に向き合ってもらえれば、何よりの幸せです。